



県外の学力向上学習会で伝えきれなかったこと

大館市校長会 会長 田山 義貴

学校最大の文化的行事である学芸会成功の余韻に浸っていた11月のある日、元義務教育課長の橋田先生から突然電話をいただき、A県B市立C小学校で行われる学力向上にかかる学習会の講師を依頼されました。

当該校では、学力向上のために「モラールアップ委員会」なる校内組織があり、第1回目は北海道教育委員会の方が講師を務め、秋田県の学力向上の取組を紹介したとのことでした。その話を受け、「秋田県の先生に来ていただいて直接話を聞こう」ということになり、人と人とのつながりをたどって、私というより、有浦小学校に白羽の矢が立ったという次第でした。

12月上旬の土曜日、本校所属の教育専門監と一緒に出かけました。相手先の状況（ニーズ）について打ち合わせる時間も少なかったことから、学力向上のためには、例えば算数であれば、「本時の学習→本時の評価問題→単元評価問題→学習状況調査→全国調査」という秋田県のシステム（流れ）が有効であることを紹介しました。

しかし、これは外から見える一面であり、学校全体という視点から考えると

- ① 保護者・地域社会との信頼関係
- ② 児童生徒のキャリア発達の支援
- ③ 教職員の意識の高揚

ということが基盤となることから、持続可能な学力向上対策を考えたときには、大館市で取り組んでいる「ふるさとキャリア教育」が大きく貢献していることを伝えなかったのですが、この部分については時間の制約もあり、十分伝えることができませんでした。

この「ふるさとキャリア教育」が学力向上に大きくかかわっているということについて、私には一つの確信がありました。それは、平成25年度の県学習状況調査で、大館市の4～6年生の成績がすべての学年・教科で全県平均を超えていることでも裏付けられるのですが、例えば、第25回大館市教育実践発表会の28本の発表中、約3分の1が「ふるさとキャリア教育」に関連していること。「ふるさとキャリア教育」の取組によって、児童生徒の学びが地に足の着いた本物の学びに近付くことで児童生徒が自らの在り方生き方を考えるまでに変容し、それを目にした教職員が元気になり、保護者や地域から高く評価されることで学校全体が自信を持っていることが根底にあると感じました。学力向上のためには、学校としての学力向上システムも大事ですが、システムを支えているのは、保護者・地域からの信頼であり、教職員の自信であるということを感じさせられました。

「大館盆地全体を教室に、市民一人一人を先生に」という「ふるさとキャリア教育」の実践は、保護者・地域からの信頼を得ることにつながり、すべての児童生徒の学力を支えています。